

1. 開催概要

展覧会名	ゴッホとゴーギャン展	
開催施設名	会期	入場者数
東京都美術館	2016 年 10 月 8 日～2016 年 12 月 18 日	390,473 人
愛知県美術館	2017 年 1 月 3 日～2017 年 3 月 20 日	224,241 人

●開催概要

19 世紀末に活躍し、今なお世界中の人々に愛されてやまないフィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)とポール・ゴーギャン(1848-1903)という二人の偉大な画家の関係に焦点をあてた展覧会を開催した。現実の世界から着想を得て、力強い筆触と鮮やかな色彩で作品を生み出したゴッホと、装飾的な線と色面を用いて、目には見えない世界をも表現しようとしたゴーギャンは、生い立ちや性格だけではなく、絵画表現も大きく異なるが、親しい交友関係を築き、1888 年に南仏アルルで約 2 カ月の共同生活を送る。彼らは共同生活において、互いの作品を評価し、また時には激しい議論を重ねながら刺激を与え合い、やがてはその生活は破綻を迎える。本展では、二人が影響を受けた画家との関係にも触れながら、初期から共同生活後のそれぞれの歩みを展観し、日本で初めて二人の画家の関係性に焦点を当てた展覧会となった。

オランダのファン・ゴッホ美術館やクレラー＝ミュラー美術館など国内外の主要な美術館の協力を得て実現された本展は、ファン・ゴッホ、ゴーギャン、その他関連作家の作品を含む 67 点(オランダ、スペイン、スコットランド、アメリカ、スイスの海外の美術館から 50 点、国内作品 17 点)で構成された。新聞・雑誌・WEB 媒体・テレビ・ラジオなど 935 媒体で記事が掲載されるなど、本展は大きな注目を集め、一般来場者に対して印象に残った展示作品のアンケートをとったところ、「アルル以降の作品群、二人が共同生活を解消してもお互いの作品に尊敬の念を持っていたこと」、「とても見ごたえがありました。二人の共同生活、その後、友情を感じとれる展示でした」、「ゴッホ目的でしたが、ゴーギャンもひまわりを描いていることを知り 2 人の関係も分かりとてもよかった!」、「ゴッホ、ゴーギャンの椅子の作品に感動しました」など、本展の趣旨に対して好意的な意見が多くみられた。

2. 美術品補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

【展示作品の質・量の充実】

政府補償制度の適用により、本展を構成する主作品の借用料などに充当することができた。具体的には、世界でも有数のコレクション内容を誇るファン・ゴッホ美術館から借用した、ゴッホのアルル時代の代表作《収穫》は、作家自身が静物画の中でも「他のすべての作品を完全に圧倒する」と述べたほどに認めた最高傑作で、本展の中心的な作品となった。

【入場料の無料化・軽減等】

東京展で、高校生の入場料無料化を、10月8日(土)、9日(日)、10日(月・祝)、15日(土)、16日(日)、22日(土)、23日(日)、29日(土)、30日(日)の合計9日間実施した。

【教育普及活動の充実】

・ジュニアガイドを制作し、東京展では、都内の区立小中学校、私立/国立/都立の中学校、過去に東京都美術館のプログラムを利用した小中学校、あわせて1,239校の全生徒分(555,950枚)に配布。配布数は、東京都美術館が開催した展覧会の中で最多となる。愛知展では、県内の小学校997校の全生徒分(415,500枚)を配布した。

・東京展では、初日の10月8日(土)に展覧会監修者のシラール・ファン・ヒューフテン氏による記念講演会を実施したほか、11月12日(土)にゴーギャン研究者である一橋大学大学院の小泉順也准教授による講演会、夜間開室した11月18日(金)、12月2日(金)に担当学芸員によるイブニング・レクチャーを実施。愛知展では、1月22日(日)に小泉順也准教授、2月19日(日)に美術家の森村泰昌氏による記念講演会を実施。また、学芸員による展示説明会を1月20日(金)、1月29日(日)、2月4日(土)、2月11日(土・祝)、2月23日(木)、3月5日(日)に実施した。

3. 事故の有無(軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む)

東京都美術館で開催中の10月22日(土)、17:00から19:00まで1階企画展示室内および1階の入口・出口を映すカメラの映像が取得できなくなったが、17:05に急きょ1階企画展示室内および1階の入口・出口の監察員および警備員数を増員し、カメラ停止時間中も含め作品に一切の異常はなかった。

4. 安全配慮に関する特別の対応

クレラー＝ミュラー美術館からは事前に警備担当者が来日し、会場内の警備体制を視察するなど、所蔵館、主催者間、輸送社館で綿密に警備体制や輸送方法について協議。海外からの輸送には1便につき1名の所蔵館側のクーリエが同乗し、国内の陸送には1便につき1名の所蔵館側のクーリエと主催者1名が同乗し、警備車が伴走した。

全作品に結界を設け、作品と結界の距離は監修者および所蔵館側のクーリエとともに確認。来場者数をチェックし入場制限を行うなど、作品の安全確保に努めた。

5. 紹介事例・今後の改善点等

「ゴッホ展」や「ゴーギャン展」など、一人の作家に焦点をあてた展覧会は日本でも数多く開催されてきたが、ゴッホとゴーギャンが共同生活をしたほど親交が深く、互いに影響し合った関係性に注目し、知名度の高い二人の作家を同時に紹介したのは日本初の試みであった。現実を描くゴッホと、想像の世界を描くゴーギャンという、二人の対照的な作風が明確にみられる作品を初期の時代から展示し、二人が出会い、アルルでの共同生活を通じ画家としてどのように影響し合ったか、そして共同生活が破綻した後も二人はいかに相手を思い合ったのかを、全て作品で展観できるほど内容が充実したものであった。これは、美術品補償制度を活用し、世界中から借用オファーが届くファン・ゴッホ美術館をはじめ、名だたる美術館からゴッホとゴーギャンをはじめとする貴重な作品を借用できたからこそ、本展のストーリーが展開でき、結果2会場あわせておよそ 60 万人を超える来場者に美術鑑賞の機会を提供できたと考える。

また、チラシやポスター、ジュニアガイドなどの印刷物や公式 HP に、本展が美術品補償制度の適用を受けている旨を記載したことで、来場者へのアピールはもとより、所蔵家側からも信頼を得られたと感じる。

6 展覧会の収支決算書

主催者名 (共通経費・東京展)東京都美術館、東京新聞、TBS
(名古屋展)愛知県美術館、中日新聞社、CBCテレビ

●収入

内 訳	決算額
展覧会収入・その他の収入	131,016 万円
共催者負担	3,898 万円
収入総額	134,914 万円

●支出

区分	決算額
企画準備等基本経費	105,367 万円
設営・運営等会場関係経費	29,547 万円
支出総額	134,914 万円